2-3.天竜川下流の荘園から継承された歴史的風致

(1)はじめに

浜松市南部の天竜川下流平野は、昭和 30 年代まで水田や畑が広がっていた。明治 22 年(1889)刊行の静岡県管内全図を見ると、例えば長上郡の市野村や天王村の各村界が直線的であることに気付く(図２－３－１)。両村の付近では、西側の敷智郡、また東側の豊田郡との郡界(天神町村と蒲村との境、橋田村と中ノ町村との境)も直線的である。敷智郡と長上郡の郡界は、浜松市の旧行政区である中区と東区の区境界として踏襲されていた。なお、豊田郡の範囲は天竜川の両岸に分かれていたように、この地域の郡界は自然地形としての天竜川や馬込川の流れとは関わっていなかった。

天竜川下流平野では、現在の浜松市だけでなく対岸の磐田市側でも、旧村界が直線的でまた並行したり直交したりしていた様子が見られる。これらは、古代の土地区画であった条里制に起因し、奈良時代以降千年以上も維持されてきた境界だと考えられる。

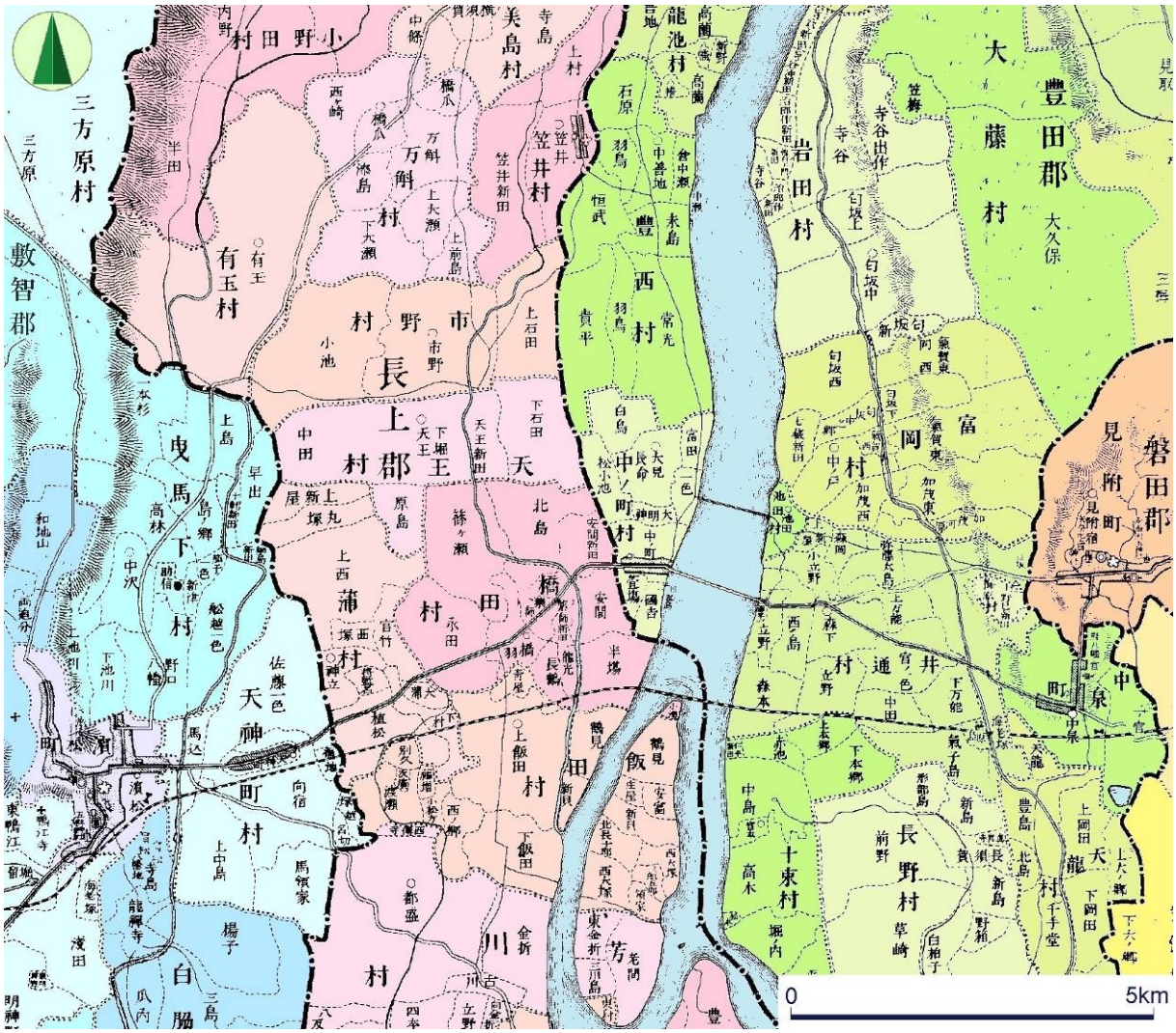

図2-3-1　明治 22 年(1889)の静岡県館内全図(部分)に見る天竜川下流の町村界(加筆着色)

昭和30年代まで、水田の畦畔が整然と並び、古代の条里制に起因すると考えられてきた。その基軸線とされたのは、奈良時代に直線的に建設された古代東海道だと想定されている。平安時代以降に、この地域に荘園も成立していくのだが、嘉応3年(1171)の『池田荘立券状』からもこれらの荘園の境界が条里を踏襲した直線界だと判明している。

荘園は地域の祭祀圏を形成し、現代まで地区のまとまりに反映されてきた。

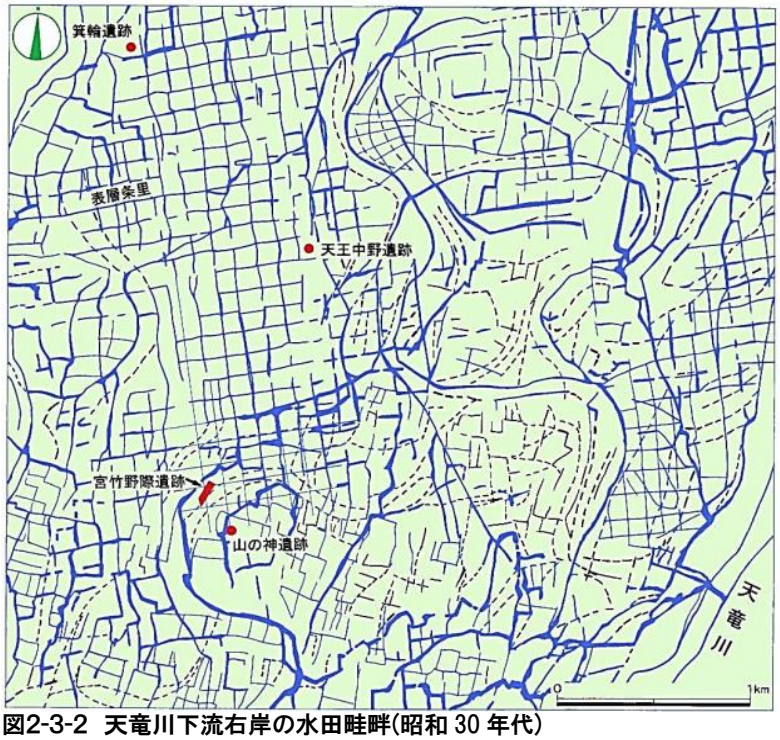

図2-3-2 天竜川下流右岸の水田畦畔(昭和30年代)

図2-3-3 浜松市南部の荘園分布(想定図)

天竜川下流平野の荘園は、古代の東海道を基線とした条里区画を境界としている。池田荘・蒲御厨・川勾荘では、荘園の中核寺社がそれぞれの荘域の北西端に位置し、農業用水を握っていた。

(2)荘園区画の再現

天竜川下流平野には、「市野荘」を初見として、複数の荘園が立荘された。とくに伊勢神宮に寄進された荘園が目立ち、これらは御厨と呼ばれている。市内中央区蒲地区から飯田地区までを含めた伊勢神宮領の荘園「蒲御厨」など複数の御厨が成立した。

荘園の範囲の全部または一部が現浜松市側に所在したと考えられるものに、前述の市野荘(中央区市野町に遺称を残す、荘域は市野町の周辺も含めてもう少し広範囲、以下同じ)のほか、羽鳥荘(中央区豊西地区に羽鳥の旧称)、池田荘(磐田市に池田地区、ただし後述する)、川勾荘(中央区河輪地区ほか、頭陀寺荘とも)美薗御厨(浜名区東美薗・西美薗ほか)、蒲御厨(中央区蒲地区ほか、後述)などがある。また、浜松荘は馬込川沿いから浜名湖畔まで及んでいた。

これらの荘園のまとまりは、明治期の行政村のまとまりにも影響し、現在の市内の各地区にも続いているように見える。若干の移動はあるが、現在の地区界からかつての荘園範囲を類推することが可能である(図２－３－３参照)。古代末から中世にかけて、この条里を境界として次々と荘園が成立した。それらの境界のうち例えば浜松荘と蒲御厨の境は、浜松市旧中区と旧東区の境界として踏襲されていた。条里による畦畔(図２－３－２)は、昭和 30 年代までこの地域で広範に認められたが、その後の耕地整理や都市化で大半が失われた。それでも旧街道や旧集落に沿って部分的に残り、また地区境として今も機能している。

図2-3-4　条里に沿った旧道
画面向かって左側の集落に沿った旧道が、条里に沿った畦畔にあたる。昭和 30 年代後半に始まった耕地整理事業によって画面右側の水路と新たな農道が広く敷設された。このため条里に沿った畦畔は広範囲で失われることになったが、旧集落に近い部分などで現在でも点在している。

この地域を代表する荘園のうち、池田荘と川勾荘は、天竜川本流が今よりも東、磐田原台地に近い場所を流れていた時代に立荘され、荘域には現磐田市内を含んでいた。ところが 15 世紀代に天竜川がほぼ現在の位置を貫流し、いずれの荘園も川の東西に分断されてしまった。このため、荘園としての一体感は失われていったものと思われる。二つの荘園とも中核は荘園の北西部にあり、現在の浜松市内にあたる。このうち川勾荘の中核寺院と目される頭陀寺と四十六所明神(現津毛利神社)は、浜松荘との境界付近に現存する。四十六所明神の祭祀圏は、社号にもあるように現磐田市内の村々にも及んでいたが、現在は神社のある芳川地区の一部に限られる。

伊勢神宮の荘園として成立した蒲御厨は、そのほぼ全域が現浜松市内に含まれる(図２－３-24 参照)。前述した二つの荘園と同様に中核社である蒲神明宮が荘域の西隅にあるのが特色である。荘域には現浜松市中央区の蒲地区、和田地区及び飯田地区ほかが含まれる。この節では地域は収れんしたが、祭祀が継続している蒲御厨について注目してみることにする。

(3)蒲御厨

①荘園の概要

「御厨」とは主に伊勢神宮に寄進された荘園をいう。蒲御厨は、現在の浜松市中央区蒲地区、和田地区及び飯田地区がほぼその範囲にあたる。中央区の名塚町(旧名切村と塚越村)、原島町(旧原島村)、及び西伝寺町(西伝寺村)もその村界から見て蒲御厨に含まれていたと考えられる。伊勢神宮の現地荘官として蒲神明宮が勧請され、神官は代々蒲家が務めた。

蒲神明宮は伊勢神宮にならい、現在でも式年遷宮を継続し、20年に一度、境内の社を建て替えている。境内にある江戸時代の灯籠には、39か村が氏子として刻まれている。現在でも地区名や小学校名として「蒲」という地名が継続している。地区の人びとは神明宮のことを「御神様」と呼ぶ。古くは、現在菊川市の妙照寺が所蔵する大般若経600巻のうち、第261巻ほか数巻の奥書に「遠江国蒲御厨中　庤神明宮　永徳三年(1383)五月廿日」とあるように、庤神明宮と称していた。「庤」は「かんだち」もしくは「こうだち」と読める。現在、神明宮の所在する地名を神立町と言い、神官の屋敷があった場所を大蒲町と言う。

②歴史的風致を構成する建造物

ア.蒲神明宮

蒲御厨の初出は永保元年(1081)の「遠江国牒」である。それ以前、『日本三代実録』には、貞観16年(874)、それまで正六位だった蒲太神ほかに従五位下を授けたとある。この蒲太神(地元では大神とも書く)が神明宮の前身であるとし、また社伝では大同年間(9世紀初め)に創建がさかのぼるとしている。そのころこの地にやってきた藤原北家出身の藤原静並が耕地を開発して伊勢神宮に寄進し、御厨の中核社として神明宮を勧請したという。蒲神明宮では伊勢神宮にならい、内宮と外宮が設けられ、それぞれに祭神も同じである。また伊勢神宮と同様に、20年に一度の式年遷宮を継続している。

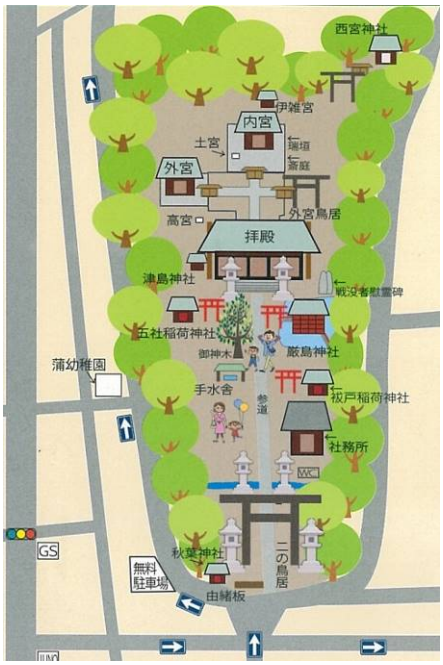

図2-3-5　蒲神明宮境内図

境内は南北に長く、その南の「二の鳥居」から江戸時代の東海道沿いの「一の鳥居」まで約1キロメートルにわたり参道が残っている。境内の森を抜けた北西は、船越公園である。かつてはこの付近を「御神渕」と呼んだ。馬込川が天竜川の本流だった時代には蛇行した河道がまさしく渕を形成していた。対岸にある船越町は中世引間宿の渡船(天竜川の渡し)を担って今にその地名を残しており、此岸の蒲神明宮付近が東側の渡船場所だったと考えられる。現在は川幅が狭まり、かつての中州まで都市化が進んでしまったが、蒲御

厨の中核で祭祀を担った蒲神明宮と、引間宿あるいは浜松荘（はままつのしょう）の祭祀を担った浜松八幡宮は、当時の天竜川をはさんだ両岸で至近距離にあった。

境内入口の鳥居前両側には天保４年(1833)に建立し、39 の村名を刻む一対の灯籠がある。右側の灯籠の台座に神立（こうだち）村以下 19 村、左側に宮竹（みやたけ）村以下 20 村が村名を連ねている。これらの村村がかつての蒲御厨の範囲をほぼ継続しているものと思われる(図２－３－24)。

図2-3-6　蒲神明宮灯籠
鳥居の左右の灯籠台座に、それぞれ寄進した村名を刻む。

図2-3-7　灯籠台座に刻む村名
向かって右側の灯籠。宮竹村から大蒲村まで 20 か村が刻まれている。

蒲神明宮　石灯籠　台座
天保四年（一八三三）建立
寄進村名

神立村　将監村　植松村　名切村　塚越村　渡瀬村　小松方村　西之郷村　福増村　上飯田村　下飯田村　西伝寺村　長鶴村　青屋村　西塚村　上之郷村　西在所村　丸塚村　上新屋村

宮竹村　永田村　原島村　篠瀬村　北島村　端和村　薬師村　薬師新田　安間村　安間新田　半場村　龍光村　鶴見村　新貝村　東大塚村　西大塚村　安留村　庄屋村　下村　大蒲村

図2-3-8　寄進された石灯籠の台座に刻まれた祭祀圏の村々

蒲神明宮境内では、板塀に囲まれた内宮と外宮が主要な社殿となる。通常はそれぞれの門が閉められているため、一般には参拝できない。内宮の入口は南面し外宮は東向きと方角が異なり、板囲いの中庭にある玉石の参道が直角に交差している。外宮の参道手前には鳥居があり、内宮の参道手前には拝殿を設けている。拝殿からは内宮の門と屋根が正面に見えるが、外宮はほとんど視覚に入らない。外宮の鳥居は拝殿から見て背後の北東側にあたり、一般の参拝者はここまで移動してから外宮を正面として遥拝することになる。

これらの建物が式年遷宮の対象で、20 年に一度の建て替えが継続してきた。ただし、必ずしもすべての建物を一斉に新築するとは限らない。令和２年(2020)が式年遷宮の年にあたったが、外宮と板塀が新築されている。

図2-3-9　内宮

図2-3-10　外宮

内宮と外宮は神明造を踏襲し、桁行３間、梁間２間で棟持柱を持ち、高欄が回る木造高床式である。一部に銅板を用いている。両者とも千木を設け、棟には堅魚木を並べる。内宮正殿の堅魚木は８本、内宮の門の上には６本、外宮正殿は７本、門が５本である。なお、現在の拝殿には６本の堅魚木が設けられている。境内には内宮の背後に伊雑宮、境内北東隅に西宮神社、池の中央に厳島神社などの社殿が配置されている。社務所の隣には、諸祭礼を始めるにあたって宮司や総代ら関係者が参拝する祓戸稲荷神社がある。拝殿の手前にある大きな一対の灯籠は、遠州織物を近代化した小山みい（みゑ）の業績を顕彰するために、永隆社が明治 33 年（1900）に寄進したものである。

図2-3-11 拝殿

図2-3-12 小山みい顕彰灯籠

境内正面入口から江戸時代の東海道までは、南東方向に参道が続いている。かつて境内ともども天竜川（現馬込川）の自然堤防を利用したゆるやかに曲がる参道である。現在は参道の両側ともすべて住宅化しているが、道路幅は４メートル程度で変化がないものと思われる。

イ.蒲神明宮鳥居（一の鳥居）

蒲神明宮へ伸びる東海道に面した参道入口には鳥居が立つ。高さ約５メートル、幅４メートルほどである。現在は鉄板を巻いて補強してある。秋の例大祭では各町の屋台がここから神明宮境内に向かう。鳥居の手前両側に石製常夜灯支持柱があり、西側のものは直方体石柱の三面に「奉献常夜灯」「村中安全」「天保十三年」と刻む。天保 13 年は西暦 1843 年にあたり、境内入口の灯籠と同じ天保年間の建立である。東側のものは昭和 36 年（1961）に再建されている。また、鳥居東脇には「国史現存 蒲大神」「明治廿七年（1897）」と刻む石碑が並んでいる。その奥に「ごしん表参道」と案内する愛称標識が立つ。

図2-3-13 東海道脇の蒲神明宮鳥居

図2-3-14 蒲大神石碑

③蒲神明宮に伝わる人々の営み

ア.式年遷宮

式年遷宮とは、伊勢神宮が古代から続けているという行事で、20 年に一度、内宮・外宮をはじめとする境内の各社殿を建て替え、また神宝等を新調する一大事業である。もともと白木で地面に直接据える掘立柱の建物であれば、そうした期間での建て替えが必須であったかと想像されるのだが、それをしきたりとして継続してきたのには、常に新しい社殿に神々をお祀りするという側面とともに、宮大工をはじめとするさまざまな技術集団が同じ建築や什器の製作に定期的に関わることで、世代間でその技を継承するのに見合う期間だという側面があると言われている。伊勢神宮にゆかりのある各地の神社(神明宮等)でも、伊勢神宮にならって遷宮が継承されているところがある。

図2-3-15 遷宮祭当日の神明宮

蒲(かば)神明宮では、文永元年(1264)以来、20 年ごとに式年遷宮を繰り返してきたという。遅延した年次もあるようだが、例えば、寛政 12 年(1800)の有玉(ありたま)村高林家の日記には、「九月廿一日　神立村神明宮御遷宮ニ付、拝見ニ行」とあり、今から 220 年前にはすでに遷宮が挙行され、周辺の村からも参詣があったことがわかる。式年遷宮は境内の社殿の悉皆改築を原則としてきた。昭和 15 年(1940)の遷宮の際には、内宮、外宮、拝殿、社務所、第一鳥居、第二鳥居を改築した。第二鳥居は境内の入口に、第一鳥居は東海道沿いの参道入口にある。それでも遷宮のたびにすべての改築ができるとは限らず、御神宝だけを新調した年もある。なお、伊勢神宮では内宮・外宮とも現社殿の隣に同じ広さの空閑地(古殿地)が用意されており、20 年ごとに新社殿を隣地に建てて遷宮を挙行し、その後に旧社殿を解体するので、社殿の位置が 20 年ごとに交替しているのだが、蒲神明宮では古殿地にあたる場所が無く、旧社殿がある同じ場所へ新築することになるので、まず境内に仮殿を設けて仮遷宮し、旧社殿を撤去しいったん更地とする。そこに白石を敷いて新たな社を建設し、社殿が完成したところで仮殿から正遷宮を執り行っている。逸話として、昭和 15 年(1940)の遷宮では神主が奏上しても仮殿から御神体が動くことを良しとしなかったという。そこで仮殿が留め置かれ、改めて翌年のお伺で神が許し、前年完成していた社殿に移ったという。遷宮完了に丸 1 年かかったことになる。

令和２年(2020)は遷宮の年にあたり、数年前から、準備が続けられていた。今回は内宮・外宮を囲む板塀と外宮の建物を新調するよう進められてきた。本体工事は、1 月 10 日に仮殿へ御神体を仮遷宮し、旧殿を解体するところから本格化した。

蒲神明宮の式年遷宮でも、社殿の建築は地元の宮大工らが請け負っており、20 年ごとに本格的な社殿を建てることが、当地域における神社建築の技術継承の場となっている。また、氏子総代ら神社関係者にとっても、20 年という間隔は準備作業や一連の儀式の流れを引き継

ぐのが可能な期間となってきた。

社殿新築がほぼ完成した令和２年８月 23 日午前 10 時から、「お白石持ち祭り」が執り行われた。神主の祝詞の後、新しい外宮社殿の下に、総代らが白い川原石を敷き詰めた。平成 12 年(2000)の式年遷宮の際には東へ約５キロメートル離れた天竜川の河原から白い石を集めて運び、総代や氏子が手分けして並べたが、今回(令和２年(2020))は新たに採集せず、20 年前に並べてあった石を工事前に一旦外して水洗いして清め、再利用することにした。白石は天竜川河川敷の各種各色の川原石のなかから花崗岩など白っぽい石を選択しており、なお掌を広げた程度の扁平な石に統一されている。

９月 16 日夕方から遷宮祭を執り行った。午後５時に神主と総代らが社務所前にて整列し、提灯を灯し鳥居をくぐってまず境内社である祓戸(はらえど)稲荷神社に参拝してから、拝殿にて祝詞奏上する。辺りが暗くなったころ灯りを消して、神主ら神職が内宮と外宮の間に設けてあった仮殿から、まず内宮へ、次いで外宮へと御神体を移動した。一般参列者はその様子をうかがうことができない。神職の発声や仮殿と本殿の扉を開閉する音が聞こえてくる。御神体が中庭を移動するにあたっては、白い布で四方を囲む。二つの宮への御神体の移動が完了した後、太刀や弓矢といった武具、鋤などの農具を模して新調した木製の神器がそれぞれ一対ずつ、役割を分担した総代らが順番に携えて拝殿から中庭を経由して運び、内宮、外宮の順で正殿に奉納された。これらも夜陰のなかで執り行われる。この年の遷宮は、神主によると祭神が移動を許し、無事に完了したのだという。

10 月 10 日、11 日には、毎年の例大祭の日程に合わせて式年遷宮奉祝祭を行った。この日を含む 10 月の三連休を近年では例大祭にあてている。遷宮祭の行事としては 10 日夜に夕祭、11 日午後に奉祝祭があり、例大祭と合わせた神楽舞などがある。両日

図2-3-16　蒲神明宮お白石持ち祭り(その1)

図2-3-17　蒲神明宮お白石持ち祭り(その2)

図2-3-18　準備した木製の神器

図2-3-19　神具の奉納

とも社務所に待機していた神主と総代らが、隊列を整えて二の鳥居をくぐって境内社を参拝し、拝殿にて祝詞奏上などに参列した。

なお、令和２年(2020)の式年遷宮に合わせて、先の伊勢神宮の式年遷宮で下賜された月読宮の旧鳥居を、蒲神明宮の外宮鳥居として再建している。

図2-3-20　境内社参拝

イ.例大祭と主な年間行事

例年の蒲神明宮では、毎年元日には総代たちが参拝し、その後、境内の椎の木の枝を鍬の形に伐ったものを用意して、拝殿にて田打ちと田植えの真似事をする。午前10時ころから20名ほどの総代たちが神主の掛け声と唱和しながら、水田に見立てた木の台の周りを交替で回って木の枝を振り下ろして大きな音をたてる。これを御田打ちという。

図2-3-21　元日の御田打ち

この行事以降、正月七日の田遊び、10月の例大祭のほか、年間多くの祭祀が続く。

10月の例大祭には、現在蒲地区の10町が参加している。10月15日に近い金・土・日にしたこともあるが、現在では10月中旬の祝日を含めた３連休に合わせている。初日は各町内での屋台(浜松市南部では祭りの「山車」を屋台と呼称している)引き回し、中日の昼には神明宮内宮・外宮前で玉石の上に筵を敷い行う庭上座礼、16名の巫女が榊と鈴を持って舞う神楽舞がある。同日夜には宵祭りとして各町から屋台が神明宮に乗り入れて整列し、本祭りの一日を拝殿の前で経過した後、その日の夕刻から各町内に引き戻っていく。各町の屋台が神明宮に向かう際には、今でも数台の屋台が蒲神明宮の第一鳥居をくぐって神明宮に向かっている。

表2-3-1　蒲神明宮　屋台引き入れ順　大正9年式年遷宮『蒲のふるさと』

引入順	村名	山車(演題)	衣装	引出順
1	永田	おその六助	ハッピ着揃え	11
2	宮竹	安達ケ原	長着揃え	10
3	大蒲	―	長着揃え	9
4	蒲下	大黒天	蔵の中の女姿	8
5	植松	野狐三次	ジバンにサルマタ揃え	7
6	上新屋	狐忠信		6
7	将監名	関の戸		5
8	丸塚	虎に清正		4
9	上西	羽衣天女と漁夫		3
10	西塚	天笠徳平		2
11	神立	楠公	モンペ袴揃え	1

蒲神明宮の例祭に屋台が引き出されるようになったのは、昭和 46 年(1971)刊行の『蒲のふるさと』(同刊行協賛会刊行)によると明治 12 年(1879)の宮竹村からだという。大正 9 年(1920)の式年遷宮には、永田(現和田町)、子安、将監、神立、植松、上新屋、丸塚、西塚、上西、大蒲の各村が屋台をしつらえて参加していた。

図2-3-22 拝殿前に整列した屋台

永田村の屋台は、掛塚から購入した。「大工・彫刻師」と「明治 11 年(1878)」の文字が墨書されている。明治 33 年(1900)の式年遷宮では、永田ほかの屋台が境内に引き入れたと記録する(『蒲のふるさと』)。永田村は戦後まで蒲神明宮に乗り入れたが、現在は停止している。式年遷宮の寄付者を見ても、上記 10 町に関係する個人と法人が多い。

図2-3-23 式年遷宮寄進者芳名録

ところで、灯籠台座に見える江戸時代の祭祀圏のうち安間郷(北島村・安間村・安間新田・薬師村・薬師新田)と半場村、それに鶴見村から安留村(安富村)付近は、東に接する「池田荘立券状」に地名が見える。安間郷に残る大字の江塚は池田荘の「江墓里」、半場村は「羽婆里」、安留村は「吉富」にあたると考えられる。池田荘は 15 世紀頃と推定される天竜川流路の変遷で分断されたと推定されており、池田荘の管理が弱体化した後、蒲御厨側から再開発したものと考えられる。「新貝」(新開:新たに開発した土地の意味)はこのことを示す地名だと推測されている(図 2-3-24 参照)。

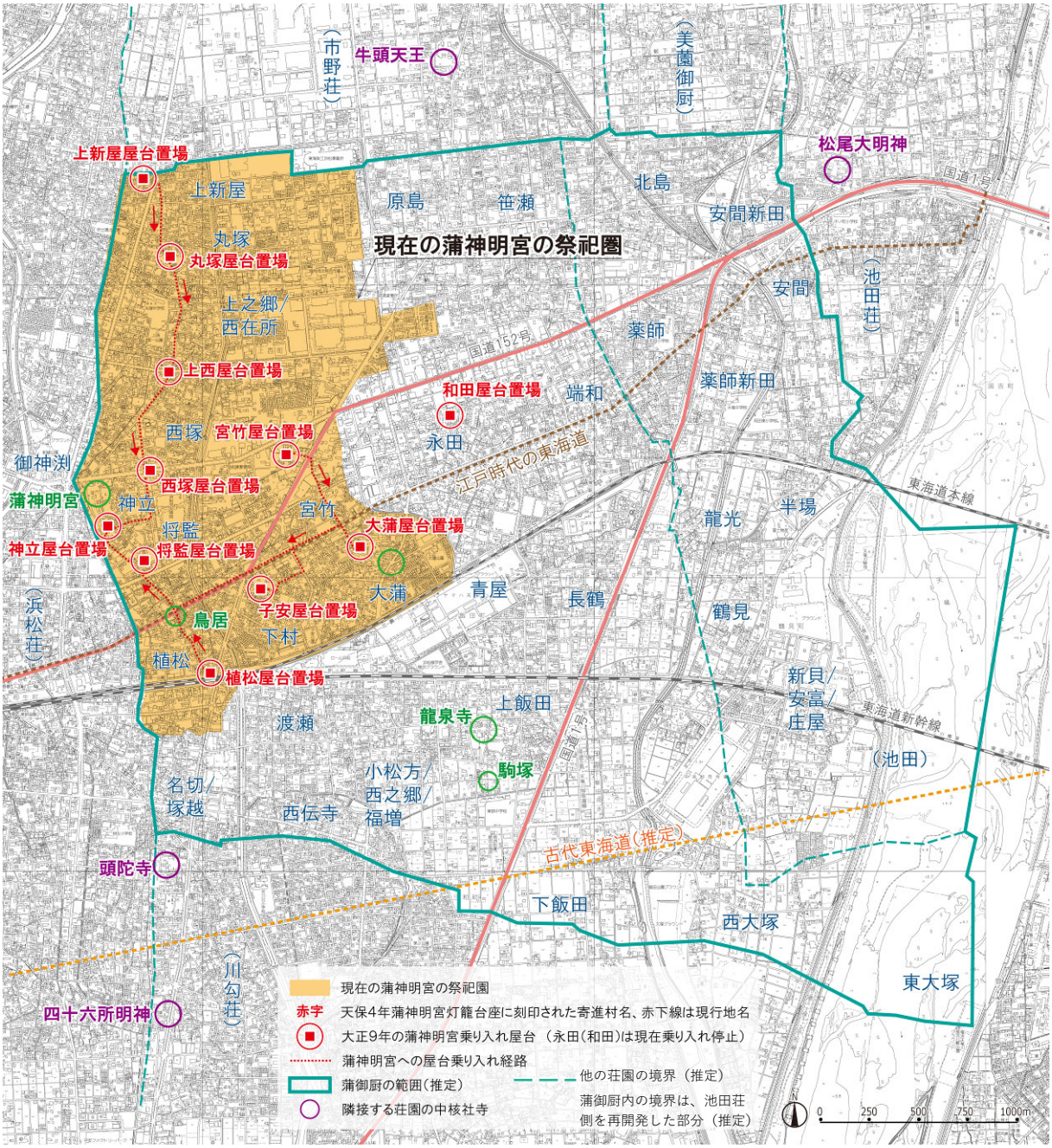

図2-3-24　蒲御厨の範囲(青線内)と現在の祭祀圏(黄色)　※東大塚村の本村は、天竜川東岸で現磐田市竜洋町域にあたる。

少なくとも江戸時代の後半までは、蒲御厨の範囲は蒲神明宮の祭祀でつながっていた。近代の行政村の形成過程で、蒲村、和田村、飯田村と大きく３つに分かれ、また周辺の村のなかには他の行政村とまとまったところがあった。このことを大きな要因として、現在は祭祀圏が蒲地区に限定されたようである。和田地区のうち永田(現和田町)は大正期までは祭祀圏だったようである。

蒲御厨の範囲は、最盛期には現在の浜松市中央区蒲地区、和田地区及び飯田地区の範囲にほぼ重なり、また現在は地区の異なる原島町、西伝寺町、名塚町を含めたものだった。おのおのの町界は真北から西に９～10 度傾いた直線とそれに直行する方眼地割(条里制)を踏襲し

ているように見える（図２－３－２参照）。天竜川下流平野に設けられた荘園（御厨を含む）が本来はほぼ直線境であったろうことを示す好例である。

(4)まとめ

浜松の南部、天竜川の下流平野は古代以来の条里制の区画が踏襲され、古代末から展開した荘園制の区画と中核社寺による祭祀が継続されてきた。都市化が進んだ地域から条里制を踏襲してきた農村風景は次第に失われてしまったが、一部の農道や畦畔には断片的に残り、何より、旧区界や町境にかつての境界がそのまま踏襲されている。

この節では市内にほぼ全域が属し今でも地域のまとまりが再現できる蒲御厨を代表させた。蒲御厨の範囲は、現在の浜松市中央区の蒲地区、和田地区及び飯田地区という三地区にほぼ重なる。江戸時代に 39 か村が寄進した灯籠銘文からも蒲神明宮がこの範囲の祭祀を担ったのが明らかである。現在は三地区に分かれているが、蒲地区というゆかりの地名を残す 10 町は、現在でも蒲神明宮を祭祀の中心としている。また、特に地区の行政界は北と西側において直線界となっていることが顕著で、この境は奈良時代の東海道を基軸として天竜川下流に施工された条里に起因すると考えられる。西側にあたる蒲御厨と浜松荘の境（中央区蒲地区と江東地区の境）は、旧中区と旧東区の行政界となっていたこともあるなど、千数百年前からの境界が活きていることになる。

蒲神明宮境内とその参道は、市南東部の天竜川下流平野においてかつて伊勢神宮の荘園として成立した蒲御厨の中核域を彷彿とさせる。蒲神明宮では勧請先の伊勢神宮にならって境内に内宮と外宮を配置し、数百年以上にわたり 20 年に一度の式年遷宮を繰り返してきた。それには御厨の中核をなした地域の人々が参画し、また毎年の祭礼も同様で、特に秋季の例大祭では、10 町の屋台が神明宮の境内に参集し拝殿前で一昼夜を過ごしてから、翌日夕方に各町内に引き戻されていく。

蒲神明宮境内と参道は、市街化が著しいかつての天竜川（馬込川）左岸の自然堤防と樹林を残す空間であり、人々は例大祭に集うだけでなく式年遷宮への参画を繰り返すことで維持されてきた景観である。

こうした景観のなかに残る蒲神明宮や参道の鳥居といった建造物と、蒲神明宮に関わる式年遷宮や例大祭などの活動は、周辺市街地と一体となって、良好な歴史的風致を形成している。

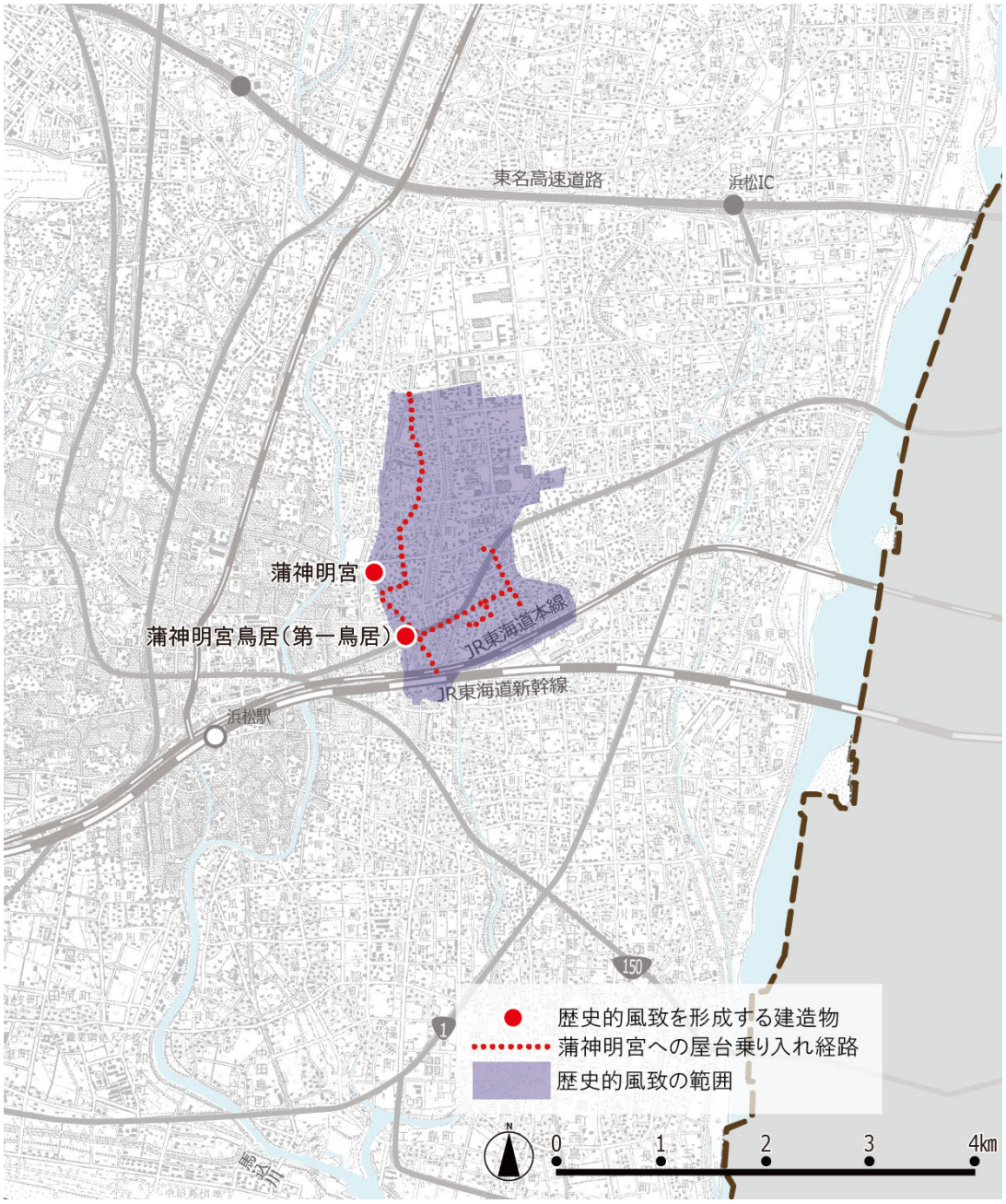

図2-3-25　天竜川下流の荘園から継承された歴史的風致の範囲

ちょっといっぷく コラム

蒲冠者・源 範頼

蒲御厨と関係が深い人物に、源範頼がいる。鎌倉幕府を開いた源頼朝の異母弟にあたる。範頼は源氏の惣領・源義朝の六男に生まれ、源義経（九男）の異母兄となる。範頼の母は池田宿の遊女だと伝わる。平治元年（1159）、父・義朝が平清盛に敗死、嫡男の頼朝は永暦元年（1160）に伊豆に配流となり、他の兄弟も各地に匿われた。範頼は蒲御厨の現地経営者だった蒲氏のもとで養育された。蒲御厨で育ったことから、「蒲冠者」と呼ばれる。御厨の範囲内にあたる中央区飯田町の竜泉寺は、範頼を養育した蒲家の別邸の跡地だという。範頼は頼朝の挙兵に義経とともに参集して平氏討伐に尽力した。寿永３年（1184）の木曽義仲の追討以降、平家との合戦には大将として活躍している。範頼は鎌倉にいる頼朝の代りに大将をつとめ、多くの鎌倉武士を従えた。これらの武将の統制や遠征先での物資の調達に苦労したようすがある。最終的には、平家を滅ぼすまで戦功をあげている。先陣を切る義経と違い、大将であったため具体的な戦績が伝わっていない。

元暦元年（1184）以降、義経が謀反によって追捕の対象となり、建久４年（1193）には範頼にも頼朝暗殺の嫌疑がかけられて伊豆の修禅寺に配流され殺害された。竜泉寺の南に駒塚と呼ばれる塚がある。地元では、範頼の愛馬が殺害された範頼の首をくわえてここまでたどりついて息絶えたと伝えている。『遠江国風土記伝』ではこの塚を「勝田塚」としている。

図2-3-26 駒塚現況

この時代の池田宿は、『池田荘立券状』から現浜松市中央区新貝町付近と推定され、範頼が養育されたという蒲氏別邸（竜泉寺）と近い。江戸時代には、源氏の旧跡を顕彰するため、徳川将軍家が竜泉寺に範頼供養塔（五輪塔）を建てた。

範頼の伝承は各地にある。足立郡石戸宿（現埼玉県北本市）には範頼が植えた（あるいは杖が根付いたとする）蒲桜（カバザクラ）が現存し、天然記念物となっている。石薬師（現三重県鈴鹿市）にも蒲桜（ガマサクラ）と呼ぶ範頼ゆかりの桜がある。平家討伐に向かう途中、範頼が石薬師に詣でて桜の枝を地面にさかさに突き刺したという。この地では、範頼の尊称を蒲冠者（がまのかじゃ）と伝える。

近年になり、蒲神明宮をはじめ浜松市中央区内に、同じ範頼にゆかりのある鈴鹿市から蒲桜の子孫の苗が譲られ、交流を深めている。

ちょっといっぷく コラム

それぞれの荘園祭祀の名残

池田荘　天竜川本流の変遷で、池田荘は中核社である松尾大明神（現大須神社）がある現市内中ノ町地区と耕地の大半がある磐田市内とに分断されてしまった。大明神の祭祀が縮小したのはこうした経緯だろう。ただ、江戸時代には再度東海道が整備され、天竜川両岸となった中ノ町屋と新たな池田宿との間で渡船が行われた。双方とも茶屋などが連なってにぎわった。また、磐田市側には松尾神社と称する小社が残る。

川勾荘　池田荘と同時期の天竜川変遷で、中核社寺である頭陀寺・四十六所明神（現津毛利神社）がある浜松市側と磐田市側に分断された。四十六所とは、かつての荘園の範囲を示すと思われる。浜松市側は現在の芳川地区と遺称を残す河輪地区が含まれるが、南端は現在の海岸線までは及ばないと思われ、不明である。津毛利神社には現在も芳川地区の屋台が集結する。

美薗御厨　現浜名区南部で東美薗・西美薗を含む北浜地区のほか、中央区積志地区の大半、笠井地区（ただし東半は羽鳥荘）がこれに当たると考えられるが、中核社寺について確証がない。積志地区のうち有玉八幡宮（現有玉神社）には有玉各町の屋台が集結し、流鏑馬が伝えられている。隣接して浜松藩独礼庄屋を勤めた高林家がある。また万斛（現中央区中郡町）にも独礼庄屋だった鈴木家があり、東隣の甘露寺を挟んだ天竜川の旧流路（安間川）沿いには戦国時代の居館だった澤木家跡がある。

春日神社（中央区笠井町）にも笠井地区の屋台が集結する。

美薗御厨の範囲は、蒲御厨他の荘園よりも平野の上流にあたり、海岸低地ではなく扇状地に立地する。水田よりも畑地の比率が高く、江戸時代以降綿花栽培で栄えた。

表2-3-2　春日神社の祭組織

地区（町）		名称
笠井町	上町	和魂社（わこんしゃ）
	住吉町	精華団（せいかだん）
	中町	政諾社（せいだくしゃ）
	西の山	西魁団（せいきだん）
	本町	笠勢司（りっせいし）
	春日町	神勢団（しんせいだん）
笠井上町		春日社（かすがしゃ）

蒲御厨他が中核社寺を荘域の北西隅に置き、農業用水の掌握を目指したのと異なり、美薗御厨ではいくつかの集落の中心に神社を配したようである。

これらの荘園跡でも、いずれも都市化が進み、当時の景観を想像できる眺望は次第に限られてきた。それでも、かつての中核社寺の祭祀に、人びとのまとまりが継承されている。